ウルリム
響
울림

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第55号
2012年6月20日発行
題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:ikuno@nskk.org　聖公会生野センター　検索

聖公会生野センター20年の写真を観る

▲聖ガブリエル教会起工式（１９９１年）であいさつする張聖子さん

▲こみち寄席80回記念（２００６年）

▶大阪教区韓国研修旅行（２００７年）

▼聖公会神学院生野実習（１９９３年）

◀生野地域福祉アクションプラン（２００６年）

聖公会生野センター20周年を迎えて

大西　修

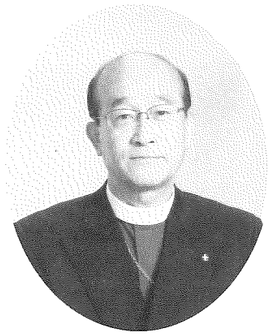
聖公会生野センターの働きは1991年、主事に呉光現氏を迎え、準備室が設けられ、翌1992年3月、大阪市生野区小路東に新しい「聖ガブリエル教会」と博愛社「こひつじ乳児保育園」が竣工したことに始まり、その働きは今年で20年になります。

この地域に拠点を置いた日本聖公会の宣教活動は、聖ガブリエル教会の創設者である張本栄（チャンボニョン）司祭が1925年、在日韓国・朝鮮人に対して開始したことに端を発します。

1980年代に入り、これまでの聖ガブリエル教会の苦難の歴史に目を向け、また日韓聖公会の合同宣教セミナーなどの学びと交流を通して新たな視野が開かれてきました。それは日本聖公会の戦争責任、特に朝鮮半島への侵略によって教会が犯してきた幾多の過ちを神に懺悔し、多くの苦難を負ってきた人々に謝罪することでもありました。日本聖公会総会はその一つの証しとして、目に見える形で和解と共生を目指す活動を開始することを決議しました。その結果、在日韓国・朝鮮人の多い生野区に聖公会生野センターが誕生したのです。

設立から10年間の歩みは、記念誌「地域と共に歩むことを願い・・・」を読んでいただくとお解りになるように、主にある皆さんの熱い祈りと思いが、積極的な活動の取り組みを推進してきました。

1986年の第39(定期)総会決議「聖ガブリエル教会、聖ガブリエル地域活動センター建設募金活動を積極的に支援し、会館完成後は、その趣旨にそって日本聖公会が運営に参加していくこと」を受けて、1992年の第45(定期)総会では日本聖公会の全教区・教会が聖公会生野センターの設立の趣旨に沿って、その運営に積極的に参画するための一つとして、同センターの働きを憶えて祈り、かつ一主日の信施を奉献することを決議し、総会は4年ごとにこの件を見直し継続を決議し、1993年から20年間にわたり継続されてきています。地元大阪教区はもとより、日本聖公会挙げて聖公会生野センターの働きを祈りと献金によって支援してくださっていることを、20周年にあたりあらためて心から感謝申し上げます。



2005年には特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）の認証を受け、行政との関わりを深め、公的助成も得られるようになりました。さらに地域とのつながりを密にしていきたいと願っております。

2008年3月には聖公会生野センターの活動の新拠点を「聖ガブリエル教会」、博愛社「こひつじ乳児保育園」と一緒であった場所から在日韓国・朝鮮人のより多く住む現在地、生野区小路3丁目に、約32坪、一部3階建ての建物を賃借することを決断し、移転しました。2008年の第57(定期)総会では、新拠点確保のための募金活動を支援する件が決議され、同年7月から2013年7月までの5年間で、募金目標額3,500万円を達成するよう進められておりますが、現今の厳しい社会の経済状況の中で、あと1年間での目標額達成はかなり困難が予想されますが、少しでも目標額に近付け、新拠点確保（取得）を実現したいと願っております。今後も変わらぬご加祷・ご支援をお願い申し上げます。

（おおにし　おさむ　理事長　大阪教区主教）

「たんぽぽの笛」—尹東柱と尹一柱

井田　泉

今から60年前の1952年、詩人・尹東柱（ユンドンジュ）の弟である尹一柱（ユンイルジュ）は「たんぽぽの笛」という詩を書いた。

日の光が温かい兄さんの墓の横に　／　たんぽぽが1株立っています。
1本には　黄色い花　／　1本には　白い種。
花は摘んで胸に挿し　／　種は息で吹いてみます。　／かるくかるく　／　空に消える種、
——兄さんも　黙って行きましたね。
目を閉じて吹いてみるたんぽぽの笛　／
兄さんの顔　はっきりと浮かびます。
飛び立った種は　／　春になれば広い野原に　／　また咲くでしょう。　／　兄さん、その時はわたしたちも会えるでしょう。

「種」と直訳したが、たんぽぽの白い綿毛のことである。吹く息に乗って飛んで行く綿毛のかなたには、7年前に福岡で獄死した兄が待っている。綿毛の種が地に落ちて、やがて芽を出し、ふたたびたんぽぽの花となって咲く時、必ず再会することができる。

「たんぽぽの笛」から14年前の1938年、20歳の兄・尹東柱は10歳の弟・一柱を「弟の印象画」という詩に書き留めた。

赤い額に 冷たい月が差し　／　弟の顔は 悲しい絵だ。
歩みを止め　／　そっと幼い手を握って
／「お前は大きくなったら何になる」
「人になる」　／　弟の悲しい ほんとうに悲しい答だ。
そおっと 握っていた手を放し　／　弟の顔を もう一度見つめる。
冷たい月が 赤い額に濡れ、　／　弟の顔は悲しい絵だ。

「たんぽぽの笛」を書いたとき、弟は14年前の月明かりの下での兄の顔と手の感触を、兄の問いと、「人となる」と言った自分の答を、思い出していただろうか。

後に尹一柱は、大韓イエス教長老会の機関誌『基督公報』(1965.2.20)に「兄、尹東柱——彼の20周忌に」という文を寄せた。

「卒業する頃にはキルケゴールを愛読し、彼の友人であったM牧師との対話で神学にも深い造詣を示し、また信仰から離れていなかったことを示したといいます。今も忘れられないのは、ある冬休みのクリスマスの日、寒い夜明けに私の手を引いて教会に出席し、敬虔な雰囲気に浸って帰る彼の姿です。」

「彼が1944年に日本の福岡刑務所に収監されていくらもならないころ、英韓対照新約聖書を送ってほしいと言うので送ってあげたことがあります。1945年2月16日、彼の獄中で29歳［訳者注、数え年］という短い生涯を終える時まで、この『主の御言葉』を唯一の友として永遠の世界に近づいて行っただろうと信じるのです。」

尹東柱は「人になる」ことの困難な時代に、人としてまっすぐに生きようとして、この日本の国によって人生を断ち切られた。今日、「君が代」を立って歌うことに良心の抵抗を感じる人にまで、権力を用いてこれを強制することは、当時と同じく「人になる」ことを許さない行為である。

「思いやりの心そなえ、深く思う人になれ」(聖歌413)と、主に招かれたわたしたちは、たんぽぽの種に未来を信じた人のことを決して軽んじない。

（いだ・いずみ　司祭　奈良基督教会牧師）

聖公会生野センター２０周年、おめでとうございます。

ナタナエル　植松　誠

「聖ガブリエル教会・ガブリエル地域活動センター」という名称で、このセンターの開設に向けた動きが始まり、多くの方々の熱意と献金、そして祈りに支えられて活動が始まりました。最初の運営委員長として関わらせていただきましたが、あの当時の熱気は今も鮮やかに脳裏に浮かんできます。

昨年３月 11 日の東日本大震災に対して、日本聖公会は「いっしょに歩こう！　プロジェクト」を始めて、被災者の支援活動にあたっていますが、聖公会生野センターも、その活動の基本は「いっしょに歩こう＝共生」ということではなかったかと思います。この基本が、キリストの福音の根幹であることを、私たちは集まる度に熱っぽく議論したことを思いだします。そして、聖公会生野センターへの関わりが、その後の私の考え方や福音理解に大きな影響を与えたことを否定することはできません。

「いっしょに歩く＝共生」は決して容易なことではありません。20 年の歴史は、それを私たちに教えてくれたように思います。だからこそ、私たちは諦めずに、神様と人への信頼をもって、これからも歩んでいくことに招かれているのだと信じます。

（うえまつ　まこと　北海道教区主教）

―誤った歴史認識を改めていこう―

菊池　邦杏

聖公会生野センターが設立されてから 20 年の間に大きな地震が阪神と東日本を襲いました。沢山の犠牲者と共に、膨大な財産の損害を被りました。日本中が救援に心を馳せて、義捐金やボランティア活動が注がれてきました。身内を亡くし、全財産を失った絶望感の中にうち沈む人々の傍らに寄り添い、励まそうと多くの方が参加してきました。

原発による災害は人間の作りだした二次災害です。これは人間が糾していかなくてはなりません。歴史認識の違いによって未だ引きずっている韓国朝鮮人の苦難も原発災害と同じく人による災害です。

聖公会生野センター創設の理念は、「生きようとするこの世のすべての人々と共に生きよう」ということです。苦しむ人の傍らに立ち、一緒に悲しみ、共に励ましあいながら生きようとするものです。その生き方を妨げるものがあれば一緒に取り除くために力を添えていこうと生野センターは発信し続けてきました。

日韓、日朝間の誤った歴史認識を洗い清めることは、在日韓国朝鮮人が戦前から続いている苦境から立ち直ることになります。政治家による在日朝鮮人への差別的な発言が現在も問われています。苦しみの根底には、神様の示す人間の尊厳が呻いています。苦しむ人と共に生きる喜びをみんなが感じられる社会に成長するために活動してきた生野センターの 20 年間とこれからのお働きに神様の祝福がありますようにお祈りし、エールを送ります。

（きくち　くにひろ　関東三教区生野委員会）

20 周年に寄せて

大岡　創

聖公会生野センター設立 20 周年おめでとうございます。これまでに京都教区では、経済的な支援だけでなく、宣教局を中心に生野における在日韓国・朝鮮人の歴史や現状、課題について学ぶ体験学習のプログラムを通してセンターとのつながりを大切にしてきました。今は、携帯やパソコンから簡単に様々な情報を得ることができます。私たちは時に、情報を得ただけでわかったつもりになることがありますが、「わかる」とは実際に人々と出会ったり、現場で空気を感じることや知ることから始まるのではないでしょうか。体験学習の実施にあたってはまず「知る」ことを大切にしたいと考えました。ここ数年の間に、活発にさまざまに活動を展開されているセンター。住民の４人に１人は在日韓国・朝鮮人である生野の地にあって、地域に根ざした共生社会の実現をめざして多くの人々が集まる拠点としてのセンターの働きが、生野のみならず様々な地域の在日韓国・朝鮮人の方々にとって「灯台」的な役割を果たすことができるように、これからも出会いとつながりを持ち続けていきたいと思います。そしてセンターの働きの真ん中にいつもイエスさまがいてくださることを共に祈り続けたいと思います。

（おおおか　はじめ　司祭　京都教区宣教局長）

聖公会生野センター 20 周年に際して

伊藤　良三

聖公会生野センター創立 20 周年おめでとうございます。1992 年３月に聖ガブリエル教会とこひつじ乳児保育園と地域活動拠点としての生野センターが建設されました。同年１月に私の所属する芦屋聖マルコ教会では教会創立 80 年を迎え、教会の会館と老朽化した愛光幼稚園園舎が竣工致しました。ともに教会の交わりの場と幼児教育の場が与えられました事に大きな喜びを感じたものでした。生野センターが多くの在日韓国朝鮮人が住んでおられる地域で、生野地域や在日韓国朝鮮人の課題や交流に積極的に取り組んでおられる姿勢にいつも感心しております。連合男子会としては 2006 年７月に、同センター・大阪城南キリスト教会を会場にして“聖公会生野センターをサポートしよう”と題して一日修養会を開催しました。資料によると開会礼拝をガブリエル教会聖堂で行い、その後コリアンタウンを見学し、城南キリスト教会にてパネルディスカッションが行われました。

参加者からは、それまでの生野地域やガブリエル教会に対する無理解・無関心に対しての反省の弁や、今後の関わり方について多くの発言があったと記されています。

最後に「センターの目指すところは教会のミッションである。イエスの視線は共にあることであり、いと小さき者の立場に立って世界を見ること、それが福音である。教会に代わってセンターがその働きをしてくれているのでないか」と総括された。

ＮＰＯ法人格を取得され、力強く活動されている貴法人に今後とも、連合男子会も手を携え、学んでいきたいと願っています。

今後の活動が益々神様に祝福され、み心にかないますようにお祈り申し上げます。

（いとう　りょうぞう　大阪教区連合男子会会長）

聖公会生野センター 20 周年

マリヤ　櫻井　揚子

呉光現氏より突然の原稿依頼に大阪教区婦人会の会長はウルリムの発刊される５月 20 日には宇野喜句子さんに引き継いでいるのですが、と申し上げましたがお受けしてしまいました。

聖公会生野センター 20 周年おめでとう御座います。

ウルリムを読ませていただくだけで、生野センターの活動を知らない私です。「のりばん」では地域のおばあさん達や若い方が集まり韓国料理をいただき、おしゃべりをしたりして楽しく過ごされ、「クリンもだん美術教室」では障がい者、健常者と共に過ごす場所として地域に密着した活動をしておられる様子を伺うのみです。

一度総会に出席させていただき、活動報告、会計など関係者の方々のお働きを知りました。後援会員になっているからという気持ちではなく、生野センターへ行ってのりばんなどでお手伝いをして一緒に過ごす機会を持ち、より生野センターの働きを知ることで、祈り、支援する心も増すのではと思います。

教区婦人会として献金をおささげするだけではなく、一人でも多くの方々が何かのかたちでかかわっていけたらと思います。

2005 年 NPO 法人格を取得して７年、新しい地を与えられ、より一層地域の方々のたまり場となり日韓交流の大切な場所としてのセンターのこれからの発展を願い祈ります。

（さくらい　ようこ　石橋聖トマス教会・大阪教区婦人会会長【原稿執筆時】）

2012 クリンもだん展美術展

デイサービスで坂田三吉名人将棋大会に参加

成績？聞かないで下さい。参加することに意義あり。

NPO法人
聖公会生野センター

プール学院高校３年生
のりばんでボランティア体験

のりばんの料理

いつも野菜たっつぷりの韓国家庭料理です

ソウル日本大使館前の平和碑
平和と女性の人権を静かに語っています

聖公会生野センター学習会

鈴木　憲二

2012年3月3日(土)、大阪城南キリスト教会を出発点として聖公会生野センター学習会が開かれた。スタッフを含めて当日の参加者は25名であった。開会礼拝、オリエンテーションの後、ＪＲ鶴橋駅から生野地域（鶴橋、コリアンタウン）を巡った。人と人がすれ違うのがやっとの商店街を通っているとキムチやチヂミの香りが漂っているのが食欲をそそった。参加者の一人は韓国風の海苔巻きを買い求め、皆で味わった。ゴマ油と塩で加工された海苔に具の入ったものは日本の海苔巻きとは一味違う風味を感じた。御幸森天神宮では日本に漢字を伝えた百済の王仁博士が詠んだといわれる「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春へと咲くやこの花」の日本語とハングルの碑を見て長い歴史の重みを感じた。この碑は2009年10月に建立されたものである。

２月21付けの朝日新聞「週間まちぶら」欄にコリアタウンかいわいの記事には休日のコリアタウンのにぎわいが写っている。ここ数年韓流ブームも相まって観光客が増えていると書かれているがこの日も多くの人でにぎわっていた。この後生野センターへ向かい在日三世で在日高齢者の介護施設「デイ・サービスさらんばん」に勤務されている玄由美（ヒョンユミ）さんからお話を伺った。

予めレジュメが用意されており、在日三世に生まれて人生の転換期結婚により大阪へこられ「さらんばん」との出会いや在日朝鮮人として生きるためを中心に話された。

東京都荒川区で生まれ、本名を知らずに育ってきたが卒業証書をもらう時点で２枚の異なる名前の証書を授与された。高校卒業後就職の時に「あなたは日本語ができますか」という面接官の質問には意外性を感じた。在日韓国人の青年団体に入って初めて「ヒョン・ユミ」の読み方を知り、その青年団体で同胞と共に話し合う

玄　由美氏

ことが癒されたひとときであった。日本人的に生きていくのは、しんどいことであった。結婚して大阪に来た時に東京と比べてこの町はなんとエネルギッシュで、喫茶店や食堂に入ってもハングル文字があり、あちこちで朝鮮のエレルギーを感じた。済州島出身の女性はよく働く。もやしを作り、子ども達を学校にやり、識字率が低いオモニ達は夜間中学に通い字を学んで、もう一度勉強して自分たちの名前が書けるようになって喜びを感じた方も多い。学んでいる人をみて学ばされるところが大いにある。共生とは何なのか。お互いを知り、人権を守られることについては国籍に関係なくなされなければならないことである。逃げるように帰化するのではなく、朝鮮人として皆の中に溶けこめるようにと結ばれた。

断片的な話しはよく聞くが、生まれてから現在に至るまで、姓名から学校での様子、就職、結婚を経てどんな体験があったかを実際のことを通じて話されたことにより、差別や偏見がどんなものであったかを知るよい機会だったと感じた。言っている方はそのつもりはないのだろうが言われた方はひどく傷つけられている。私たちは知らず知らずの間に在日の人たちをなにげない言葉で傷つけているのだということもあらためて教えられた。

（すずき　けんじ　尼崎聖ステパノ教会
大阪教区後援会副会長）

戻ってきました

中村　香

日本に帰って来て満開の桜を見たとき、胸が張ち切れるかと思った。そして韓国を去るときには、胸が引き千切られるかと思った。自分が日本に行きたいと言ったにも関わらず。

韓国人と結婚し、２年間ソウルに、帰農して１年間アサンに、４年間ウムソンに住んだ。都市を離れるのとは違い、４年間住んだ田舎ウムソンに別れを告げるのは至難の業だった。日本行きを決めた一年前からここを去ることを思っては泣いていた。そしていよいよその日はやってきた。

実の所、私は日本に住みたいなあとは思いつつ実際に住めるとは夢にも思ってなかった。まず結婚した７年前には妻が韓国に住むことが当たり前だと思っていたし（何とも若いぜ！）、経済的に考えても外国人の夫を連れて自国に住むことができる妻は多くない。ということでほとんど諦めていた日本行きがこうして実現したのは、夫のお陰である。そして私のひどいアトピーとうつ病のお陰でもある(笑)。私はこれらの出来事に、日本に帰れと言う神様のメッセージを受け取ったと思っている。うつ病というのは自分が神様から与えられたタラントを十分に活かせないときに出てくる病気じゃないかとも思っている。

そもそも私は何故、私の人生の中で韓国に行かなければならなかったのか、そして韓国に行って自分のやるべきことを果たせたのか、というのは甚だ疑問である。そして必要以上のあるいは無駄な苦労をしたのではないのかと考える時、なんとも泣けてくる。起きることは全て必然であり全てのことに意味があるとはいうが、私は昔から、神様が準備してくれた道を逸れて逸れて、逸れては神様がまた軌道修正して、それを繰り返してしまった気がする。目的地を設定し、道を間違えたら新しい道を再検索してくれるカーナビのように。何度も何度ももうええっちゅうねん！ってぐらい再検索するカーナビ、人間がいくら道を逸れても諦めずに導いてくれるのは、神の恩寵であるとしか言いようがない。昨年起きた東北大震災も私が日本に帰らなければならないと思った要因であるが、私がこれから日本ですべきことは何なのか、真剣に神に祈り、今度こそ神様ナビゲーションに率直に従いたいと思う。

私は「日本」というよく分からないがぼんやりとした境界内に生まれ、日本の風土で日本人の両親に育てられ、日本の物を食し、所謂「日本人」として育っていった。それが同じように「韓国人」として生きてきた人に出会い結婚をし、今度は「韓国」というぼんやりとした境界内に住み、近くて遠い国と言われる所以を知る。今までの固定観念や先入観が吹き飛んだ。正しいとされてきたものがどうでもよかったり、気にもかけないことが重要だったり。はっきり言えるのは人間の善悪の判断とは文化的なものに過ぎないということである。豪に入れば豪に従えだ。だからこそ神の善悪の基準が重要なのだと思ったりもする。イエスがそうであったように例えそれが文化や風習に反するものであってもおかしいことは「おかしい」と言う勇気を持ちたい。どこの国に住んでも。

私は「韓国」という風土に生き、沢山の韓国人と出会い、韓国の物を食し７年を過ごした。皮膚は30日間、血は？年経つと新しいものになるというが、私は韓国により育てられ体も心も細胞も韓国人になっていって、そんじょそこらの韓国人よりよっぽど韓国人らしい韓国人になっていた。厳密に言うと韓国アジュンマ（おばちゃん）、しかも田舎のアジュンマに。

だから韓国を去るときは身も心も削られるような思いだった。それは私の一部が韓国人である証拠でもあった。村のハラボジハルモニ（おじいさんおばあさん）との別れは、もうこれが最後のような気がして涙が止まらない。ハラボジハルモニは私が日本人であるにも関わらず、本当に可愛がってくれた。娘のようだといいながら。「ソウナダ（寂しくなる）。」と何度も言われ、泣かないようにしてたのに涙が止まらない。こんな悲しみを与えた自分が憎かった。それでも日本に帰ろうとする自分が憎かった。そうやって私は日本に帰ってきた。

結婚して日本から韓国に行った日、また帰省する度、日本を去る悲しみがしんどかったが、同じように韓国を去るのも今や苦しみである。困ったもんだ。その分再会が喜びになるだろうか。お金をガバガバ儲けて早く韓国と日本を自由にワッタガッタ（行ったり来たり）しなくては。

こうして私の７年間の韓国生活は終わった。ただ私の一部となった「韓国」は日本に住んでいても、日本にいるからこそ色濃く現れるだろう（ほとんどはアジュンマの習性として？！）。これからも私の中に生きている「韓国」を大切に大切にしながら、今度は日本で生きていきたい。

すでに韓国が恋しく、恋しい...。

（なかむら　かおり　韓国から帰国、神戸在住）

金石範『過去からの行進』（岩波書店）

磯貝 治良

朝鮮半島の分断状況が巨怪な壁になって立ちはだかる。在日の登場人物たちを巻き込むまがまがしい出来事は、その状況に起因する。

「朝鮮籍」の高在洙（コジェス）は「再入国許可証」だけを持って、ビザなしで日本の空港を出国して済州島に向かう。そして済州国際空港まで辿りついたところで発覚し、地下３階の取調室でナムサン（情報機関）から来た男に尋問される。そして、日本へ強制送還。

1400 枚ほどの長編小説は、そんな「人を食った」はなしで始まる。しかし、小説は別の人物に移って、過酷な在日現代史へ展開する。

小説の現在時は 1991 年。多くの人びとの血と犠牲によって贖（あがな）われた韓国の民主化が、本格化しようとする端境（はざかい）の時である（先のエピソードで収監されずに送還されるのは時代の一端が反映されている）。

韓成三（ハンソンサム）は７年前の 84 年、すでに妻子をもつ身でソウルのＹ大学へ再留学する。彼が情報機関に連行されたのは、その間もなくだった。容疑は、70 年代に在日韓国学生同盟に所属して反国家・政府転覆運動を行ない、済州島４・３事件を書き続ける「北系」の「反韓」作家・金一潭（キムイルタム）と接触して影響を受けた、というものだった。

韓成三にはまったく身に覚えのない嫌疑だった。しかし、執拗な尋問と凄まじい拷問に耐えかねて、取調官のシナリオ通りの陳述書を書かされる。「ナムサン」のねらいは、韓成三に作家金一潭に対して政府招聘による韓国入国と「朝鮮籍」から「韓国籍」への変更を工作させることにあった（尋問と拷問の場面は、体験者の証言とはまた別に読者を圧倒する。小説の想像力が登場人物の内面心理と下意識を抉り出して、言語イメージ化するからだ。作者ならではの怒りのこもった描写だ）。

顔と背中に生々しく残る拷問の傷跡と強要されて陳述書を書いた屈辱を負って、韓成三は日本に戻る。帰国後、その心身のトラウマをどう乗りこえるのか、小説の核心はそこに向かう。韓成三は、韓国人をやめると宣言しつつも、金一潭との親密な時間を経て、記憶の再生と「復讐」の意味を模索する（韓成三の受難を招いた金一潭については、内省的に描かれてはいない）。また、叔父が虐殺された４・３事件を知ろうと入国するために「韓国籍」に変更する高在洙にも背中を押される。そして、幻影に逃れていた７年前の体験を現実の記憶にリセットして、今は外交官となって日本にいる、７年前の取調官、拷問者と対峙する。

それにしても、長編をつらぬく文体の分厚さは、作者特有のそれとはいえ、半端ではない。モノ語りの地の文のなかにふんだんにリフレインされる、幻想のモノローグ。それは、作中の日常がありふれた風景になりかけると現われて、日常を食い破る。安穏に身をかわそうとする読者を、現実と深層意識の境域に引き戻して、小説時空の重圧に耐えさせる。このような文体は題材のアクチュアリティと併せて、日本（語）文学から久しく姿を消している（文章には構文に不自然な箇所もあるが、それは編集者の問題だろう）。

済州島４・３事件の死者たちが墓所から立ち現れて、墓所もなく地の底に埋められた死者たちを祭壇に案内する、死者が死者を弔う葬列の情景は圧巻である。そして、あやしく美しい。

（いそがい　じろう　在日朝鮮人作家を読む会代表）

2011 年度会費納入者及びご献金者ご芳名

（2011 年４月１日～ 2012 年３月 31 日　順不同・敬称略）

昨年１年間ありがとうございました。団体等でとりまとめてご送金下さった場合なども多々あり、すべての方のお名前を掲載できておりませんが、感謝しております。又複数回ご送金下さった方もお名前の掲載は一度にさせていただきました。

石脇慶聡 / 堀江裕一 / 須佐美浩一 / 岡本勝 / 宮脇博子 / 尾崎茂雄 / 嵯峨崎順子 / 五十嵐正司 / 佐藤耕一 / 日比谷潔 / 宮嶋眞 / 井田泉 / 青柳美知子 / 竹林徑一 / 呉光現 / こひつじ乳児保育園 / 張聖子 / 春名英夫 / 大西修 / 古澤陽代 / 大橋襄 / 伊藤美佐子 / 奥田哲夫 / 山本保彦 / 城下彰 /（有）冷麺館 / 岡野利治 / 大田美智子 / 小出裕司 / 岩城聰 / 日本聖公会大阪教区婦人会 / 黒田裕 / 井上進次 / 宇野徹 / 野村潔 / 井出吉志子 / 松原恵美子 / 久保道則 / 金秀男 / 鈴木憲二 / 奥晋一郎 / 川村昌子 / 鄭雅英 / 中島省三 / 山田拓路 / 古澤秀利 / 山本眞 / 岡田まり子 / 森中みよ子 / 大久保忠昭 / 佐藤千鶴子 / 香山まり子 / 松居勲 / 辻本秀子 / 橋本祥子 / 聖ﾆｺﾗｽ保育園 / 福永芽久美 / 吉岡容子 / 目崎宗世 / 小川昌之 / 神谷尚孝 / 内藤昇 / 大塚勝 / 塩田純子 / 岡本愛子 / 黒田益弘 / 保坂久代 / 松本一郎 / 辻節子 / 若村正博 / 小林満寿子 / 後藤聡 / 森中央 / 林香代子 / 孫裕 / 越山健蔵久下克己 / 中和子 / 石田浩子 / 吉井ミツ / 関正勝・澄子 / 広江照子 / 泉迪子 / 後藤由江 / 米満司郎 / 東敏勝 / 小室一 / 榎本房代 / 富谷晋 / 吉田哲子 / 野上千春 / 吉田常夫 / 福田順子 / 高田須磨雄 / 河野裕道 / 近澤淑子 / 宮橋コウ / 小林幸子 / 雨宮大朔・寿子 / 畑野めぐみ / 中出てる子 / 平野聡 / 寺本真名 / 鈴木靖夫 / 植松喜久江 / 板東長輝 / 横内洋子 / 若宮英生 / 島田由紀子 / 本田修 / 内宮隆夫 / 三村タミエ / 桜井揚子 / 佐藤悦子 / 相楽弘子 / 長野加代子 / 瀬山義美 / 松田祥吾 / 田中廉 / 今西政弘・時子 / 坪田敬子 / 早川文子 / 藤木典子 / 杉本美津子 / 大野吾子 / 堀武 / 堀貴美子 / 小堀孝子 / 江野隆夫 / 菅寛量 / 国津進 / 国津恵美子 / 佐谷和子 / 前原潔 / 多方清子 / 今村祥子 / 服部喜代司 / 服部慶子 / 棚原恵正 / 李美好 / 松浦順子 / 佐野信三 / 申英子 / 中村香・光・由香里・内田真理 / 村上恵依子 / 本多修 / 福崎精造 / 樋口敏雄 / 村上君子 / 三宅肇 / 東蜂多寿 / 小野田芳夫 / 八尾恵三 / 内田照子 / 武藤六治 / 辻彩乃 / 学校法人プール学院 / 真鍋倫子 / 中島千恵子 / 竹林敏子 / 金光秀晃 / 松本正俊 / 植松誠 / 中山一郎 / 中芝永次 / 増岡広宣 / 小野周一 / 池本則子 / 児玉勢津子 / 辻潤 / 田辺聖公会愛の園シオン会 / アジア国際夏期学校 / 大畑喜道 / 趙秀一 / 糸井玲子 / 石橋聖トマス教会 / 舟茂恵子 / 猿橋靖・正子 / 高見久江 / 中原恵 / 大西　憲子 / 橋本克也 / 社会福祉法人博愛社 / 中村豊・道子 / 立教女学院 / 京都教区 / 金沢聖ヨハネ教会信徒一同 / 聖光教会婦人会 / 宮嶋眞 / 大阪聖パウロ教会婦人会 / 大畑喜道 / 松蔭女学院 / 横内洋子 / 三光塾 / 大洲幼稚園 / 木村多恵子 / 稲荷山幼稚園 / 大久保優子 / 古谷美子 / 山根博子 / 目崎宗世 / 神谷尚孝 / 聖マルコ幼稚園 / 名古屋聖マタイ幼稚園 / 川越基督教会 / 前田良彦・恂子 / 尾崎茂雄 / 平安女学院中高 / 愛光幼稚園 / 豊田幼稚園 / 姜勇求 / 市川聖マリヤ教会 / 東京聖テモテ教会奉仕会 / シオン幼稚園 / 草香ヶ幼稚園 / 岩田幼稚園 / 相澤牧人 / 桃山キリスト教会 / 聖ルカ保育園 / 横浜山手聖公会 / 宮古聖ヤコブ教会 / 鈴木満紀子・慰 / 百井幸子 / 平安女学院キリスト教センター / 沼津聖ヨハネ教会 / 聖光教会 / 神戸昇天教会 / 高地敬 / 在日本韓国 YMCA/ 横浜聖アンデレ教会 / 名古屋聖ステパノ教会 / 銚子諸聖徒教会 / 米子聖ニコラス教会 / 松戸聖パウロ教会 / 岡田まり子 / 池本真知子 / 金澤聖ヨハネ教会信徒一同 / 京都聖光教会婦人会 / 豊田英子 / 北関東教区 / 石橋聖トマス教会 / 芦屋聖マルコ教会 / 堺聖テモテ教会 / 京都教区婦人会 / プール学院中高

編集委員リレーエッセイ

二つの選挙

呉　光現

昨年、今年と私に関わる選挙が韓日であった。一つは大阪府知事・大阪市長のダブル選挙。もう一つは今年の４月１１日にあった韓国の総選挙。大阪の選挙は府民であり市民である私は有権者でなかった。勝利した府知事、市長はしきりに「民意」を強調し「グレートリセット」を進めている。ひとこと言いたい。「私たちは民意にすらなれない」という事を。これは何を意味するのだろうか？有権者でない人は「無視をしても良い」という事になるのだろうか？論評は別にして現在進んでいる大阪の動きは決して真の「民意」ではないことを。これが基本だ。「少数意見に声を傾けることが・・・・」。それを気がついているのかいないのかは彼らからは聞こえてこない。まるで全権委任されたかのような誤解をしてほしくない。

もう一つの韓国の国会総選挙は私にとっては「生まれて初めての選挙」であった。のりばんのオモニたちと一緒に選挙人登録、そして投票をした。ある人の言葉「スッキリした」「人間になった気分や」。

私はこの言葉の歴史を踏みしめたい。少なくとも選ぶ側の経験をしたことで、在日の「人間になる」、まさにこれまでは人間でなかったのか？いやいやそうではない、当然人間である。しかし本人がそう思えなかった歴史とそれを放置してきた人たち「韓日の社会」の責任は大きい。「人間になった」というひと言は私にとっては「今年の流行語大賞」になるかもしれない。

最後に大阪の首長さんたちに言いたいこと一つ。ビルマ（いわゆるミャンマー）の補欠選挙でアウンサンスーチーさん率いる野党が大勝利を収めた。直後に彼女はこういった「与党に復讐してはならない。彼らの声に謙虚に耳を傾けましょう」。こんな政治家はこの日本社会では出てこないのだろうか？

（お　くぁんひょん）

余韻

■20年前、二番目の娘がまだオンマ（母）の胎内にいた。彼女は今年から保育士として働いている。こんなことを思うと時代を感じる20年である。ひと言で言うと「全力疾走」だった。■「民営化」の名の下にすべてが市場原理に飲み込まれているこの頃、人と人とのつながりが弱くなっている。ＳＮＳ（インターネットのコミュニティーサイト）がつながりと勘違いしている社会になったのだろうか？その病巣が「在特会」に象徴される人たちではないだろうか？「ネットと愛国」という本で彼らの現実の生活が経済的にも人間関係でも「貧困」であることがうかがえた。こんな時こそアナログで「集まる」という営みが大切だと思う。■今回の20周年記念号は懐かしい写真を載せた。私にとっては記憶と記録を併せ持つような写真であり聖公会生野センターの歩みでもある。20周年を感謝して記念のＤＶＤも作成した。多くの人が観てくださるのを願っている。（ぴっくぁんちゃ）

大韓聖公会わかち合いの家に招待された本田哲郎神父と呉光現（2004年９月）
（呉光現撮影）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇正 会 費　年額　１口　10,000円
◇後援会費　年額　１口　3,000円から
・郵便振込00910-1-321780「聖公会生野センター」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 三菱東京ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0002
大阪市生野区小路３丁目11番19号
TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869
E-mail: ikuno@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：大　西　　修
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは再生紙を使用しています。